

## 設立10年を迎えて

渥美伊都子



月日の流れは早いもので渥美国際交流財団が設立されて10年を迎えました。

この間、理事、監事、評議員、選考委員その他各方面からご支援をいただき、お蔭様で順調に成果をあげつつありますこと、心より感謝しております。

生前主人は日本の国際化推進のため、特に仕事の関係上、建設業の国際化のため心を砕いておりました。IFAPCA（アジア西太平洋建設業協会国際連盟）の会長を務めました1974年からの15年間、毎年各国もちまわりで開催される総会に出席し、建設業の社会的責任や近代化を図るため努力していました。このようにして毎年アジアの国々の方と親しくお付き合いしていくうちに、若者達がもっと交流を深めてお互いを知ることが必要ではないかと感じていました。

この願いを込めて1994年4月1日に渥美国際交流奨学財団設立の運びとなりました。日本の大学院で博士論文を執筆をしている留学生を対象に奨学金を支給することにしました。毎年12名というささやかな事業ではありますが、きめ細かい交流を計るために、毎月奨学生を招いて話し合い、研究や生活面の支援をするよう心がけています。夏には家族も一緒に軽井沢に招いてバーベキューパーティを開き、モンゴルの焼肉や中国の餃子、インドのカレーなどお国自慢の料理を作ってお互いに交流をはかり、子供達を交えてなごやかな2日間を過します。また、冬には餅つき大会を開いて日本のお正月を祝い、日本文化に親しむことにしています。私も若い研究者と触れ合う楽しい年中行事となりました。

渥美奨学生は、1年間で多くの方は博士号を取得されますが、取得出来なくてもその後頑張って研究を続け、ほとんどの方が目的を達成します。長い留学生生活を終えた奨学生達は、自国へ帰ったり、日本やその他の国で研究を続けたり、各々の職場で活躍

しています。

この奨学期間を終了した研究者たちは、渥美財団の思い出を忘れないように「ラクーン会」を結成しました。主人が手遊びで描いていた狸にちなんで、第一期生がつけた名前です。近年IT化のおかげで、同窓生をインターネットで結ぶことが出来、世界の何処に居ても同時に連絡をとれるようになりました。私達が旅に出た時も、旅先でラクーン会を開き、皆さんに会うのも楽しみの1つです。

この多分野に渡る外国人研究者たちは、日本あるいは海外の大学や研究所や企業で活躍しています。国境を越えた情報化時代に、世界にちらばったこの有能な研究者を結んで変化の大きい時代に何か役に立つ提言が出来るのではないかと、2000年7月7日に、今西が代表となって「関口グローバル研究会(SGRA)」を発足させました。関口は財団の事務局がある場所で、このローカルな1地点からグローバルに発信していきたいという希望をもってつけた名前です。SGRAは、グローバル化に伴う問題に対して、様々な研究や提言を行い、その成果をフォーラム(年4回)、レポート(年8冊)、ホームページ等の方法で、広く社会に発信していくという活動で、渥美奨学生を中心に、他の留学生や日本人にもご支援ご協力いただいています。関係者は大変熱心にとりくんでおりますので、この研究会が益々活発に発展することを願っております。

毎年3月にその年の奨学生達と送別会を開き、1年間楽しかったこと、苦しかったことを思い出しながら話に花が咲き、何時までも別れを惜しむひと時を過します。最後に「おかげさまで、ありがとうございました。」と感謝の言葉を受けると本当によかったと胸が熱くなるのを感じます。この優秀な研究者達の今後の活躍と幸せを心から祈っております。